



奈良盆地の西に聳える葛城、金剛の山並み。その東側の山麓、御所市森脇に一言主神社がある。杉並木の長い参道をぬけると、広い境内に神さびた風格の社殿が鎮まる。あたりは苔生した老木、大木に包まれ、時おり鳥の声だけが聞こえる静けさだ。神社の一言主神は、願い事を一言だけ聞いてくれる神として、地元では「一言さん」と親しまれている。

昔、この付近で、毎夜一匹の大きなクモが出て荒らしまわり、人々を困らせていた。そこへ一言主神が通りかかり、「私が捕まえてやろう」といい、首尾よく退治した。村人はその死骸を田の中に埋めたという。この時、クモの大きな牙が取り置かれ、今も神社の宝物となっている。この話とは別に、『日本書紀』にも土グモの話が見える。昔、神武天皇が日向(宮崎)か

土蜘蛛塚

ら東の国々を征服する旅に出た熊野から上陸して大和の宇陀などを経て葛城の高尾張邑に来了。ここで天皇は土グモと戦い、これを退治した。土グモは土地の民のこと。この時、葛のつるで作った網でクモを覆い殺した。よってこの地を「葛城」と名づけたという。やがて天皇は檀原宮で即位した。神社の境内に、その土グモを埋めたという「蜘蛛塚」がある。



境内にある樹齢推定1200年、高さ約24mの大銀杏。幹の樹皮に垂れた乳を思わせる膨らみがあり乳垂れ銀杏とも。葉が落ちる晩秋、あたりは黄金色に埋め尽くされる。



昔、神武天皇が、土グモを退治し、頭と胴と脚を切って埋め、その上に大きな石を置いた。その「蜘蛛塚」が一言主神社の境内にある。

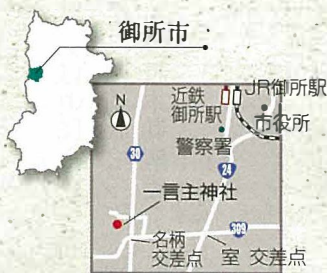
神武天皇の神話が、一言主神の話を形を変えて長く今日まで伝えられたのか。

ところで、一言主神は、お顔が醜かったともいう。昔、修験道の開祖、役行者が葛城山と吉野の金峯山に橋を架けようとした。それを手伝った一言主神は容貌を恥じて夜だけ働き、夜明け前に姿を隠したという。

江戸時代の俳人、松尾芭蕉は『笈の小文』の旅で葛城山にふれ、「猶みたし花に明行神の顔」の句を残した。

花々に包まれた葛城の夜明け。そこにおわす神のお顔が、まさか、醜いなんて。いや、麗しいに違いない、といった気持ちか一言主神社の境内にその句碑がたつ。春の花、秋の紅葉、いつの季節も葛城の山里は美しい。

葛城一言主神社へは…
近鉄御所駅よりタクシーまたは
五条バスセンター行きバス「宮戸橋」下車西へ2km。



園葛城一言主神社 ☎0745-66-0178